

田原市図書館ふしぎ文学半島プロジェクト 2025
“ふしぎ文学の達人”が選んだ 「ふしぎ」 オススメ本

選者：金原瑞人氏
(翻訳家・法政大学名誉教授)

1. 『ハリネズミ・モンテカルロ食人記・森の中の林』
鄭執／著 関根謙／訳 アストラハウス 2024

◆中国、気鋭の新人作家が語る、妙にリアルでな
んとも不思議な物語3編。①頭のネジの外れた伯
父と「ハリネズミ」の強烈な呪いの話、②駆け落
ちの相手をレストランで待つ受験生の変身の話、
③祖父、父、息子、そして祖父によって植樹され
たハコヤナギの木がそれぞれの視点から語る愛
と殺人の話。3作ともに不可思議な運命が凝縮さ
れた物語になっているところが素晴らしい。



選者コメント

2. 『新編 怪奇幻想の文学』1～6
新紀元社 2022～2025

◆このシリーズが完結した。約50年前に紀田
順一郎・荒俣宏編で刊行された全7巻の海外小
説のアンソロジーをもとに、そのふたりと牧原
勝志が、「特に現在の読者に届けたいもの」を新
たに選んで、新訳で収録したものだ。初訳の作
品も多数。また、あまりに有名な作品や基本図
書は、除外されているのも大きな特色だ。ホラ
ー、恐怖小説、幻想小説、ファンタジー好きに
はたまらない。こんなアンソロジーは海外でも
まずないと思う。

3. 『神話と伝説 配色アイデア事典』

桜井輝子／著 橋賢亀／絵
エクスナレッジ 2024

◆これはイラストレーターやデザイナーのための
配色見本。ギリシア、ケルト、北欧、中国、イン
ド、日本の神話に出てくる神々や人物、幻獣、
霊獣、聖獣などの絵とともに、それをもとにし
た「8つの色玉を使った配色パレット」が掲載
されていて、「配色のポイントはもちろん、色の
由来や、配色パレットを使ったときの効果、活
用アイデアについても」解説されている。表紙
を見てのとおりに、橋賢亀のイラストが素晴し
い！

4. 『冬の子』ジャック・ケッチャム／著
金子浩／訳 扶桑社 2025

◆ケッチャムの代表作『隣の家少女』の読者
は、絶対に読みたくなかった派と、こんなにショ
ッキングで後味が悪いのに強烈に胸に響く作品
をよく書いてくれた派の2派に分かれる。そん
なケッチャムの短編集。もちろん『隣の家少女』
っぽい作品もあるけど、なにげに不思議な作
品や見事にオチの決まった作品もあって、最後
まで飽きさせない。19編中、ほぼ半分が「当た
り」！こんなにヒット率の高い短編集になか
なかお目にかかれない。

5. 『夢のうた』 左右社編集部／編
左右社 2025

◆「同時代の歌人100人がうたった100首
の〈海〉の短歌アンソロジー」から始まったこ
のシリーズ、〈雪〉〈月〉〈花〉〈雨〉と続いて、
6冊目がこれ。「昔いた人の消しのこした夢が
わたしたちかもしれんね いいね」(雪舟えま)
「縫っているうちにレースのカーテンの一部
になって夢へともどる」(谷川電話)「夢にわれ
妊娠をしてパンなればふっくらとしたパンの
子を産む」(渡辺松男)「泣きながらあなたを洗
うゆめをみた触覚のない蝶に追われて」(東直
子)「眠ってゐる君がほどけてするすると真つ
赤なりボンになる夢を見た」(知花くらら)

1.『新釈 小泉八雲「怪談」』

雪富千晶紀／著 東京創元社 2025

◆日本ホラー小説大賞に輝いた、期待の新鋭が放つ、新境地！ 今年、朝の連続テレビ小説で新たな脚光を浴びている小泉八雲と妻の小泉セツという「怪談を愛した」夫妻。その夫・八雲の代表作である『怪談』を、現代風にアレンジしたホラー&ミステリー短篇集。「雪女」や「貉」などのよく知られた物語が、意想外の新時代の怪談として、新たな装いのもと、現代に蘇る！

2.『因果ばなし』小泉八雲／原作 円城塔／翻案

中川学／絵 岩崎書店 2025

◆来日から百年余を経て、ふたたび熱い注目を集める〈小泉八雲の怪談世界〉……その妖しい精華が「怪談えほん」となって蘇る！ 本書は八雲が好んだ明治期の怪談百物語本の中から選び抜かれた恐怖度満点の一冊。余命幾ばくもない武家の奥方の最期の望み。それは若く美しい腰元の裸身を、無惨に蹂躪することだった！ 死に瀕した老女の恐るべき呪いから逃れるために、腰元が選択した最後の手段とは？

3.『ライオンの場所』チャールズ・ウィリアムズ／著

横山茂雄／訳 国書刊行会 2025

◆これは、ちょっと形容を絶するような、凄まじい物語である。英国のありふれた田舎町が、ある日突然、次元を異にする存在たち（勇壮無比なライオン、モスラのような巨大蛾、恐竜を思わせる荒鷲、そして世にも奇怪な姿をした「天使」たち！）が跳梁する「異世界の闘いの場」と化してしまうのだ。民家の中には突如、断崖絶壁が出現して……読者の意表を突きまくる展開に、啞然呆然必至の稀代の怪作にして傑作！

選者：東雅夫氏

(アンソロジスト・文芸評論家)



4.『ポルターガイストの囚人』

上條一輝／著 東京創元社 2025

◆昨年「創元長編ホラー賞」でデビューした新鋭の第二弾が、早くも登場。前作『深淵のテレパス』と同じく、〈あしや超常現象調査〉の個性あふれるメンバーたちが、依頼人を悩ませる奇怪な騒霊（騒がしい霊）現象に、敢然と立ち向かう。前回とは奇怪な地下世界が主舞台だったが、今回は天上はるか〈東京スカイツリー〉の最上階が、クライマックスの主要な舞台となる。息も継がせぬ波乱万丈の展開は、さらにパワーアップ！？

5.『深夜の祝祭 澁澤龍彦怪異小品集』

澁澤龍彦／著 東雅夫／編 平凡社 2025

◆幻想と怪奇に満ちた数多の名エッセーで知られる作者は、その早すぎた晩年、最初期の夢だった「物語作者」としての才能を絢爛と開花させ、珠玉の小説作品を遺すこととなった。その精華というべき細緻な長短篇群を一巻に収めたのが、本書である。「女妖について」「書妖について」「地妖について」の三章構成で、ドラコニア世界の真価を今に伝えている。

リストのタイトル

10冊は、田原市図書館で所蔵しています。

2025.11作成